

地名の地理學的考察とその一例 (七)

小 林 悟 一 郎

n スミ

クマは水陸界の場合も用ひられてゐることは確かである。そのクマとよく似たものにこのスミがある。之は又道の交叉、曲角、村落又は一區域の隅角の意のものもあるが、茲では地形から見たスミのみに限る。地形以外の隅角の角は別にする。茲には水陸の界に於ける地形によると思はれるものに住ノ江(小)住吉(筑)がある。後者は同名の地が佐賀、三潯、山門にもある。由來住ノ江と住吉とは同一地に對する別字であることが多い。灘波の住江など有名である。そして吉は古へ「えし」と訓じたので、地名にも「え」に當てたのである。今の「よし」の「よ」に當るわけである。故に吉は江に當てたのであつたと考

へる。傳記によつて大阪の住江にひとしかるべき博多の住吉は、スミヨシとよむ。この地域に於ける住吉の用字は皆同様に訓んでゐる。

スミノエは隅ノ江である。大阪のは勿論博多のも古地形は隅と呼ぶべきものであつたらうと按ぜられる。河口近くの位置等も兩者共通の條件である。この地形の相似といふことが、その起原歴史を等しうせしめた事が多いと思ふ。この住吉神即ち海神の信仰といふことが、その本社、住吉といふ地名の廣くある一因かと思はれる。皆共に川なり海なりの水邊の地であることはそれに基くであらうと思ふが、中には住吉―隅芦隅江といふ原義により、別個に起つたものがないとは言はれぬ。即ち神を祀れるが故のみなら

ば、地形の酷似せざる地にも水邊でさへあれば有り得る事である。本地の住吉をみるに三潞の住吉は水神によると思はれるが、山門及佐賀郡のものは新開發の田野であつて、一時は水に臨んだ事のある土地であること自明である。佐賀郡の南部新屋敷のあたりは地形も古を偲ぶに充分である。兩者共今は神社もないから神に依ると斷信することは出来ぬ。山門のは或は三潞・博多何れかからの移出部落かと思はれる。住ノ江は東西に分れ二郡（小・杵）に跨るが、西の方が大きい。神社は東住江の後にあるが此の地名は獨自の起原を有し、阪、博の住吉に無關係とみたい。水に臨まぬものでは大角（朝）角ノ久保（井）等がある。共に川はあるが條件にはならぬと思ふ。

〇ツメ

筆者は方言拾集の場合、殊に變つた方言といふものではないが、殊によく用ひられて山麓を呼び、また谷のツメ、山のツメ、隅のツメといふので、之れが地名にもありはしまいかと探し

たのであつた。その地名搜索の結果はそれを裏書してくれて以外な收穫があつたのである。この語は棲、爪と同じく、ツマのツマは此の動詞乃至は形容詞化である。採集した地名は左の如くである。皆山地部である。

小爪（早）岩詰、狩集（東）詰ノ瀬（神）

試みに左にその各々の地形を圖示するが（第十一圖）それにより等しく或種地形の相果てむとする所であり、行當り、行詰る感のある所であることが分明すると思ふ。右の中狩集はカリ

第十一圖



第十二圖



地名の地理的學考察とその一例

ヤ—假屋?—詰めであると判断してゐる即ち彼の播磨風土記に故號「神集之覆形」とある神集は、今神詰(上詰の義なりしか)といふと對照されるものである。

尙之の語の變化だと思はれるものに、トメ(留)トモ(友・鰯・柄)ツミ(積)ツマ(妻・樓)及富等があると思つてゐる。その中富は極めて多いので、それ以外を舉げると左の如きものがフィールドにある。

重留(早)稲留・行友(糸) = 光友・妻(八)朝妻(井)

第十二圖は右の地形を示したものである。重留は西油山に近い所であつて、地勢上詰まれる山麓であるが、重留の用字は何時の頃にか捻出したものと思ふ。西油山に寺刹のありし事などより推して、寺家詰の意と判断されるのである。稲留は地名辭書などには稻積ノ城の地だと推してゐる。ツミからトメへの變化が證せられることになるが、ツミはツメであると思ふ。茲の場合「稻積」の字義に拘はれず、八女の稻富と共に地形によるものと考へる。

行友・光友の友もツメの系統である。人名などとは信ぜられないのである。妻は舊郡名にあるがこの類に屬するものと信ずる。即ち南筑諸山の西部を受けた地である。朝妻の如きは淺詰であると思はれるのである。上記それらの地形圖は左に示す通りである。稻富は富として別にすると、他はみな眞の平地にはない。

ツメのツがオ訥に轉じた事は上記の留に見られたのであるが、更にトミとして富字が當

僱れた形跡があるのである。地名に於ける富はさう言ふ地形詞であると見做してゐるのである。好字として單に考ふべきものでないと信ずる。そして好字として之等の文字が當てられたといのは以前の音に當り、且好字である故にこそ採られたと言ふものが多いことと思ふ。裕福富裕といふ様な意味で、最初から撰ばれたものではないと思ふ。

トミには尙鳶の古訓なるトミがある。ビとミとは相通ずる。或は却つてトミ(ツメ)からトビに變つた地名もあらうと思はれる。飛永といふ地名姓名の如きは、ツメ永の意であつて鳶永の意ではない。そしてトミはツメの用ひ法を前述した通りに用ひられてゐる。フィールドのを念の爲め舉げると左の如きものを見る。

富(糸) 久富(佐) 富岡、福富(杵) 福富、吉富、諸富、徳富
福富(佐) 富安、諸富(譜) 有富、吉富(山) 久富、富重、稻富
富久、富安、(八) 富安、富多、(井) 富本、富水、安富(淳)
富永、頼田(朝)

以上の中には合字から出たものもあるが、大

體の分布圖を作つて見ると非常にツメと思合されるものである(第七圖)參照。一つの斜面の絶斷された様な所、斜面に突當つた様な所が多い様である。富本の如きは殊に顯著なもので、詰下の意味が地形によく表はされてゐる。同じく富岡は詰岡であり、諸富はムル(水)詰、吉富は芦詰、稻富はイナ詰である。富安は詰谷といふものの只弱いだけの感じである様に思ふ(第六圖參照)。安と同じく平地に分布してゐて弱い地形に當てられてゐる。或は兩者共却つて地形が顯著でない爲めに、後來好字を探り來つて當用するに際しても、そこに地形詞たらしむる爲めの執着もなかつて、自由な氣のしたのものかも知れぬ。玄海側には糸島に一つしかなく、有明側と言へども割合に下つ方に多いのである。この海近い分布といふことは、鳶に關係あるかとも思へるけれども、安の分布及用法とを合せ思ふ時、地形に結びつけることの無理ならざるを信ずるのである。平地に於ける人文推移の急テンポから、好字の借用はより多くなるのである。

紀記にある富の長髓彦といふ人名も、富、長髓共に地名であるが、詰、長ソオ(曾根は後述)であつて、その男といふ意味と思つてゐる。尙ほツメが ローロ 相通によりツネー常に轉ぜられて行つたでないかと思はれるものがあるか之は後項に於いて「常」として纏めて述べる。

p サコ

之は未だ不幸にして詳述したものを聞かぬが一般には迫の字を用ひられて詰と略々同じ意味に解する人が多い様である。ツメと近似したものにセメ(攻・迫)があるからである。勿論迫字を用ひる所は地形一般にその形勢ある爲であると思ふ。之が爲めにこそ今ツメの次に述べるわけであるがサコの原義に就いては別に求めねばならぬと思ふ。迫を日本でセコと訓ずるがこのセコであるか如何か明斷出來ない。セコは挾處セコの意であらう。地名辭書には四國に於いてサコ(佐古・迫)は水なき山谷を言へりとするから、前では谷を呼ぶことと考へられてゐる。併しその原義は「水なき」といふ條件から考へると、

地名の地理學的考察とその一例

尺・石の音をサク、サカ等と日本ではいふことがある。その一轉してサコとなつたのでないかと思ふのである。岩石又岩石多き地と呼んだものではあるまいか。砂—Iサゴも同系と考へてゐる。砂に就いては他項に譲るが、サコには九州に於いては「水無き」といふ條件はない様に思はれる。併しこの考へは尙捨つべきでなく調査してみたいと思つてゐる。本地域に於いて之に作・坂の用字がある。サク、サカの原字からの轉だと考へると一層この「石」でないかと思はせるが、作坂も地形上強ち誤僣となし難いのである。即ち山間・山麓の作地又は坂といふこともあり得ることであり、その轉訛も自然であるからである。併し信州の佐久といふ地名は、或學者の如くスキなどとは考へ度くなく、このサコに關係あると思ふのである。然りとすれば作・坂等よりも、石の方が廣い地域を呼んだものといふ點から考へて妥當な様にも思ふ。

裂尾など言ふ人もある併しあまりに振弄した考へである。古い言葉では天ノ佐具賣、木花之

佐久夜姫のサクなどがある。之等も石と取れぬ事はない。

欽明紀に上佐平沙宅……の「上」にソクといふ假名がある。之は百濟の官名の記事であるからソクは鮮語であることは確かである。上のことを鮮では Saka といふので、同系の言語と思ふが、之はこのサコに關係ないか。即ち上段の呼び名でないかとも考へられる。この事は三養基郡基山に迫ツクといふ所があるが、それは小さい川の山麓原下を流るる場合の攻撃斜面なる、急斜面の上段にある。今その攻撃斜面そのものも、またその下に出来た新しい假丘も開墾されてゐるが、一般聚落より高い所である。これも捨て難いと思ふ、總べてに通ずるとは言ひ得ない。調査不充分の爲め斷案を下し得ないことは今後の研究に免して頂く。

兎に角この迫は山地性のものである。分布はそれをよく物語り得てゐる。

迫、迫ツク（糸松坂ツク）龍作ツク（神）＝羽佐子（佐）深迫（浮）
深迫も南筑山麓にあつて山地性を脱し得ない

この外に「坂」字を用いたものにこの部でないかと思はれるものがあるけれども、坂の部に譲つた。

q クボ

之には久保の用字が最も多く見られる。窪は却つて少い。その字を嫌ひもしたであらうし、二字にする必要もあつたであらう。姓氏にも多く久保と用字する。

クボがクマに通ずることは既に述べた。b 音は却つて m から來たのが多いから、クモ・クマが古くて、このクボ・クボむなどは新しいかも知れぬ。併し古事記には上卷の火遠理命に綿津見神が誨へる言葉に、「その兄高田アゲタを作らば汝が命は下田クボを營り給へ」とあるから、その編纂當時はクボの語のあつたことは確かである。クボクマ兩新舊の差はその以前のことである。下は落込みたる地のことである。クボとクマの地形の類似も亦必然である。フィールドでは十七の中背振部に入り、其他も山麓を去るものは佐賀郡の久保田、三潞の久保・浮羽の大窪・朝倉

の相窪等に限られる位である。十三といふものは山麓と見做される。

r 洞穴類

洞といふ地名が糸島郡にある。天ヶ岳の西麓の谷地である。これは姓氏にもあるが之が果して洞穴の意味であるかどうか疑はしい。それはホラといふ和訓は、洞の韓訓吾と音通するからである。たしかに洞の和訓は韓訓から轉じて來たものと思ふが、韓に於いては洞—吾は谷の意味であり村落の意となり、我に於ける現在では洞—ホラは文字和訓共に洞穴の意である。併し我に於いても韓のコルと等しきものであつたであらうと思ふ。即ち糸島のこの洞といふのは谷か村落かの意であると信ずる。その洞といふ部落のある谷中には、「谷」といふ部落もあつて、右を傍證しやうと思ふ。尙韓との關係を確かめ得れば幸である。さりとて言へ、洞穴といふものが異靈神鬼の住家と考へられ珍らしがられる爲めに、地名としてはあり得べきものである。早良の狸穴、佐賀の満穴—水穴の義—のアナは

確かに之れである。

洞穴乃至は掘抜き之地を呼ぶのにウツロ・ウロといふ語があるが、此の地域ではウロといふよりもウドといふ訛語の方が地名にも通用されてゐる。ウロは地名に探出し得なかつた。ウドには宇都(糸)宇土・杉ノ宇土・西宇土(東)右渡(小)など、みな背振山地部に限られてゐるが少くはない。このウト、ウドはウロの訛りといふよりも、却つて古原音らしく、鵜戸宮(日向)に於いても洞穴を指したウトであるらしい。又このウトは峽・詰などの用ひ方とよく似た用方が地名に表はれてゐる。伊都國のイトは或はこれではないかとも思ふ。イロコ—ウロコの轉移などと同じく通じ得べき事であると思ふ。ウツロはウトから來たと思はれる。ロは羅—壤かも知れぬ。この地域では掘り抜いた道をウツロ道、ウツロ坂とはいふが、地名には明瞭なものはない。小城郡に上無津呂・下無津呂といふ聚落名がある。ウトがほの暗い谷・深い谷に用ひられることのある所から、ウツロも谷に用ひられたとすれ

ば、このムツロはウツロと關係ある様に思ふ。又下ムツロから上ムツロに行く谷に前掲の右渡といふのがあることも、證明の資となされるところ。ムムは下、上の^{シモ}mo、^{カミ}miのmがウツロの^ニに近付いた結果だと思つてゐる。

以上にあげたホラ・アナ・ウト・ウツロといふものが、背振山地部に限られてゐることは當然であるが、八女郡にこの洞穴に關係ありと思はれるものに釘崎といふのが二つある。このクキは釘の意ではなくて岫でないかと思ふ。

クキはククにも通じ、クシにも通ずるらしくクシの或物には岫の意のものがあると思はれる。フィールドから外れてはゐるが、日田郡の櫛崎ノ洞道といふのは、今の隧道が開鑿される以前からあつたらしい洞穴、——即ちクシはクキの轉でないかと思ふのである。クク、クシは尙後述せねばならぬ事がある。

s 野

之が山林に對しての場合には植物景觀の語になるわけであるが、地形としても山谷に對して用

ひられるので、茲に述べることにする。元來この野は「延ぶ」のノ、ヌに通ずるとされてゐる點から、斯る排列を取ることに決したのである。之は地名には極めて多い。フィールドにも百四十五を算する。その中背振山地部に五十六ある割合から言へば尙山地部が多いわけである。野山、野原とよぶものは、山地又はその麓原に多いからであるらしきも、平地部に於ける草野などは他の言葉に掩はれることが多いらしい。田・治・川等である。又杵島及三池の干拓地には野が少く、後者に只一つ前者には皆無といふことになつてゐる。

この野には乃から來たのは極めて多い。野野古賀(佐)布古賀(神)は等しく野乃古賀であり、大野(筑)が大乃であることは顯著である。内野大野島等枚舉に堪えぬ。尙その外に沼から來たと思はれるものがある。沼も野も古へは其はヌであつた爲めである。福岡南郊の野間などはその疑ひが深い。又野多目といふのが同じく筑紫郡にあるが、沼溜・沼田埋・沼田前いづれかだと

思つてゐる。その野が沼であることは確かである。今でも近くに大池といふ貯水池があるのはその痕跡とも見られる。野田といふ様なものにも、沼田から來たものが含まれてゐると思ふ。之等各個の説明の如きは煩瑣に過ぎると思ふ故に、他に機會を求めてのことにする。

ハ原

ハラ・ハル總べてにして二百十四あつて、地名詞の中最も多く用ひられてゐることになる。背振山地部に百二十七、他に八十七といふ分布である。之も山麓原が最もよく見られる。ハラハルには遙・晴・拂・廣・平・開等の通語が多い様であるが、フレ(村)の系統から來たものもあるらしい。洞^{ホウ}などとも通ずる所から考へると、必ずしも原野・平原にのみあるものでなく、山谷にもあり得るわけである。開きとハルと通ずる中間と思はれるものに、「ハル／＼」といふ言葉がある。小郡の晴氣はこのハルの部に入れてゐるが、ヒラキ(開)でありバルきであつて鰐・治と同意となる。勿論ハル(鰐・治)はこゝに入れて

てゐる之れは左の如きものがあるが、之れは明らかに開鰐地なるを示す。併し其の外「原」字を用ひてゐるものにも、原田とか庄原などいふ様なものは限りなくある。

久治・甘^タ治(井)初田(小)八田(佐)永治(池)春田(八)三春・新治(淳)

以上はみな平地にあるが、概して山地に於いては原字の當用が多く、開^{ヒラキ}などの如きも木に結び付けて平木などとしてゐる位に、自然に擬した用字をしようとする傾向がある。その爲めにハルを地形詞「原」の文字を當僱する。初田・八田などはハタへの轉移過程であるが、之はハタの部にまた關説するであらう。また開も人文の部に項を設ける積りである。三春の春は原・原口などいふ、その小字^{アザ}のハル三個の意を好字に依つて代へたのである。

尙ほ原は九州ではハルにのみに限つて讀む様に言はれてゐるが、絶對的法則ではない。牛原^{ウシハラ}(二)上原^{ウヘハラ}(八)の如きものが少々はある。

糸島郡に波呂といふのがある。之もハルの中

に入れた。山麓の小さい開折扇にあるが、その水上に平田といふ部落のあることなどは、波呂がハルであることを證明し得ると思ふ。

u 島

シマが狭・締の訓と通ずることは古今の通説である。「仕舞ふ」にも關係ありとすれば、シマのマはマル・マフのマである。梵語四摩との關係は如何はしくはあるまいか。

可なり古い言葉である。そしてこの島は水を廻らすといふ條件は古くからも嚴重に守られては來てゐない。水云々といふことはこの言葉の原義にとつて、没却していゝものであつたらしいこともよく唱へられる所である。即ち弧懸の地と吉田氏其他も斷じた。

尙ほ平地にあるものなども、川と關係あつて海に關係なきものもあるから、島の分布と海岸の進退とは簡單に處理することは出來ぬ。又古史などに海遠き地に島といふ地があつても、それが直ちに「水」に縁なきものと斷定しても出來ぬ。敷島ノ宮の如きものである。川の流路は時

に變化するといふこともあり、又二個の川がその地を圍むが如く廻り流れる場合——その地の面積に比し川は如何に小さくとも、又完全に巡らされなくとも——そこを島とよんだらしいこともある。原義に於いて水と關係したか否かといふことは尙研究すべきであると思ふ。併し比擬にしろ、原義にしろ、孤立一劃の地をシマといふことは確かである。

本地域に於いては背振山地部の山間平野には七個ある。沿岸には五個あり、沖の方には玄海小・大杭姫等の島がある。眞の山地には一つもない陸中に於ける七個は少いから列舉して見る。

田島・貞島(早)八島(糸)玉島・滿島・中島(東)彦島・織島(小)

小城の二つは山麓で、前者は後者の小字といふことになつてゐる。そして前者は背後の百八十米高地が、岩藏・今山に走る構造線によつて孤立状態になつてゐるので、その山に負へるものであらうことが窺はれる。山麓にみる斯様な島は或はツメと同じ意のセメの轉、セマの變つたのかも知れぬ。

北斜面即ち玄海側のものは皆相當の平地にあつて、只八島と中島が山に近い。玉島と眞島が各々玉島川、室見川の中洲によることは疑ひない。砂洲をシマといふ所から考へれば、シは洲の^スに通じマはヤマの^マと同じく場所、土地の義かとも按ぜられる。これは只弄考の一として揚げて置く。

田島の谷が海水に接してゐたといひ、又それはたしかであるが、その當時の島であるならば平安時代より新しいものであつてはならぬと思ふ。貞島と共に地名誌執筆の折評論したい事がある。

海中の島はこの玄海側のものだけであるので島名としてこゝに括説しやうと思ふ。海中の島は能古(淺島ともかく)(早)寶・玄海・小杭・大杭・柱・コブ・姫・韋(糸)高島(東)これだけがフイー^ルド内となる。能古に就いては大部不明である元寇の戦にかこつけて殘の文字を説く村夫子、いや都先生もあるが、能古の名は古く萬葉にもあるから滑稽といふべきである。奴ノ港・小門な

どに近きこの島は、神代史にも關係あり相な地に思はれるが、今の處それはない。退潮の方に當る爲め「退く」でないかとも思はれ、u 韵一般に古く、o 韵はそれから轉じて來たものであるのでノコに轉ずることは不自然でない。併し能は尙奴即ち灘の港にも關係ある様に思れる。今後研究し度い事の一つである。

寶島は穂の延であるらしく、小さい高い(十三米)島である。

玄海は月海とも言ひ、玄海灘の方が後であるらしい。共に中古の地名である。机・柱も各その形容と覺える。机島は大體東西に長く――南方の本陸方面から見て長く見える――、柱島は殆んど圓い。そして机が海拔三十三米なるに比し、柱は約七十六米で高いのである。

コブ島は、かの深江町南西の子負ノ原――兒饗原とも書き萩原ともいふ所である。南方の山谷を開拆した淀川による綺麗な沖積扇で、その末端は嘗つて海水に接したことは明らかであるが今はその直下から深江に至るまでの砂丘が連つ

て面白い地形である。此處にあつた二顆石により神功皇后子生みを堪えられた石とて、萬葉その他風土記等に傳へられる原野である。——のコブとも通ずることでないかと思ふ。コブとは昆布のことと言ひ、蜘蛛もいふ。子負といふ様なことは神后に寄せて里人の語り出せる奇談であると思ふ。八幡社は今尙あるが神は多く傳説に生れるものである。陣痛を石や樹木を抱かせて忍ばせた様な原始風習はあるらしいが、それら風習と神后とを結び付けて誇大したものと思はれる。萬葉などの語る所は要領を得ない。之れは閑説ではある。

姫島は海女島にも想はれる珍らしからぬ島名である。韋島は低い島であるが、韋をハと讀ませる理由、経程は不明である。韓などにもあらば Khan-Han ともあり、引いては n 音の去脱はあり得ることであるからハとなることは矛盾しないと思ふ。據るべき資料を未だ得ぬ。

高島は領巾振山と好一對のビュートで、その名の示す如く急斜面な島であつて、松浦瀉に凡

立する好漢である。志摩郡の志摩は糸島低地が海水に全てを充たされぬとも呼び得る地形ではあるが、その低地の新しい沖積であることは地名によく表はれて、海峡であつたことを信じ得る。

さて平地部に於ける島は極めて多く、百〇三に達する。その分布は一概に言へないが、肥前に於いては前記彦島織島を除けば、十米等高線上にはないと言つていい。

中島の如きは最も多い。中の部に述べた如く平地部だけで十三、即ち島の一割三分を占めてゐる。之れは大部分川中島の意味であるから、海島と考へて取扱つてはならぬ。尙河中の洲なりしことを示すと思はれるものに永島、永島(杵)出来島(三)柳島(八)折島(神)などもある。平島三島、見島なども參考になると思ふ。博多灣の如く三紀層其他の殘陸を見る所でなく、玄海の如き火成岩の逆出を見る地でない有明側は、宛然皿の如き陥没である。三紀以前の地層は深く傾き入つてゐるから、殘陸を見なかつたらしい

ので、大部は川の島と考へられるのである。分布圖によつても河筋、又は河道帶によく分布してゐることが見られる。平地に於ける低平なる島の大部、併かも沖積以外の地層のないものは川により名を得た島であると考へていい。

島を音讀するのは山門の古島コト一つだけであつた。

Ⅴ 浦

ウラと言ふ語には幾通りもの思想が含まれてゐる。今では大體表に對する思想をいふが之には上に對するもの、外に對するもの、初に對するもの等即ち、下・内・末・中などと言ふものに用ひられた時代がある。まだ後の意もあり、ウラ・ウへと對して左右の意味としても宇治拾遺物語のユヅ取りの段にある。今でも農夫・樵夫たちが樹木を切り出す時、幹の所即ち材を取つた後の枝葉をウラと言ふ。ウラ葉といふことは「末」をウラ、ウレと讀ませ、梢をウラと言つた事の残つてゐるものと思ふ。斯かるわけで地形に於ける浦も小江灣とか、汀邊などと限

つてゐると考へると大いに間違ふ。「包裡」「末端」「後背」といふ言葉——位置詞たる原義と見做されるが、それらが當用される地形にあると考へたらいと思ふ。そして「包裡」といふ思想が有する如く、立體的即ち起伏ある地に多く、谷地によぶことが多い爲め、山地部に極めて多い。三十五の中二十九が山地部にある。又海に臨む浦曲の浦は糸島郡に極めて多く、ヘッドビーチを伴ふ半圓の海灣を多く有する爲めであらう。同郡では宮浦・西浦・福浦が現に海に臨んで居り、浦志・松浦の浦は裏かとも思はれて、後者の如きは「本村」といふ所に對してゐる様であるが、之も海に接した所ではある。惜しむらくは之等の發生の時代を徴し得なかつたのである。荻ノ浦は浦の字に適した所と思はれ海に接した時の事であらう。その他山地部では小城・三養基の兩郡が多い。

平地部に於ける六個の中、海に臨んだものは深浦(杵)江浦(池)位のもので、山浦(瀝)石浦(井)は川に沿ひ、上浦(朝)は小石原川の谷の謂

であると思ふ。藤田浦(井)は藤田(今は八女郡)と稱してゐた地の浦(山地部の例に等しく包裡から來て谷の謂)で、藤田川(八と瀦とに跨る)と對稱されるものであるが、之はどちらかと言へば山地性である。最も面白い對稱と思はれるものは平尾浦谷と高宮浦谷とが同一丘陵群にあることで、谷(今は福岡市内)といふ聚落がある様に、浦・谷など多くあり得る所である。

W 其他

崖、之も地名にありはしまいかと思つて探したが、影取(糸)掛目(井)などが然う思はれる丈けである。掛目は新しい聚落であつて、筑水の攻撃面に當る南筑山地の餘勢から、河岸は尙高

いので適中せるものと思ふ。鞍掛・欠町・面掛等も如何かと思はれるが之は別項にする。岨即ちソハは添を當用されてゐることが多いため、明かに残つたものはない。龜原をソハ原と見られるが茲には略説する。

其他地勢を擬似し形容したものは多い。釜・竈・鎌即ちカマが谷を形容され、頭巾・飯盛・鉢などと山を形容する類極めて多い。殊に之に當てられるものは日常器具・身體・家畜等の形を言へるものが大部である。之れは各自の項に述べるので詳述しないが、地形の表はし方の一面であることを形式上附言して置く。

(未完)

○アルバニヤ國の農業

アルバニヤは今日尙幼稚なる農具を利用し、僅に十センチメートルの深きを耕すに過ぎざれば、其産額も乏しく年額三千五百萬金法の輸入あるに對し、家畜農産物等を以て、僅に七百萬金法を輸出するに過ぎざる現狀に於ては、まづ農業の改善を急務とし、同國政府は經濟調査委員會を設けて其振興をはかりたるに、まづ農業銀行を設立すべき由を可決せり、つぎに新式農具を配付し、種子の良きものを輸入し、灌漑工事を行ひ、ポンプの使用をすゝめる、スクタリ、エルバツサン、アルギスカストロに於て煙草栽培を奨励し、資本の貸與をはかること、漁業についても改善の必要をはかるべしといふ程度

の報告ありたり。